見るたのしみと読むよろこび

とんぼの本

創刊30周年フェア

私の好きなとんぼの本


伊藤まさこ


川瀬敏郎


中谷美紀


中村好文


原田マハ


とんぼのマークができるまで
nakaban

座談会 とんぼの本会議
辻山良雄　中村邦夫　幅允孝

とんぼの本
新潮社

私の好きなとんぼの本❶

伊藤まさこ

スタイリスト



いとう・まさこ　1970年神奈川県生れ。文化服装学院でデザインと服作りを学ぶ。料理や雑貨、テーブルまわりのスタイリストとして、数々の女性誌や料理本で活躍。著書に『あの人の食器棚』『家事のニホヘト』『台所のニホヘト』『伊藤まさこの食材えらび』など。

自分に正直に生きるとは



向田邦子 暮しの愉しみ

向田邦子　向田和子

144頁／1470円

「どうも私は、いざとなると花より団子になってしまう」

若葉に会いに旅に出たのに、新幹線を降りたとき、向田さんの眼にまっ先にとびこんできたのは味噌カツの看板だった。

食いしん坊の料理好き。靴や服を買ったつもりで気に入りの器をひとつ手に入れ、酒のつまみをささっと盛る。旅も仕事も、料理も、おしゃれも、すべてがすべて、向田邦子というひとりの女性の暮しの愉しみに繋がっている。

自分に正直に生きるとは？　その答えがこの本にはたくさん詰まっているような気がしてならない。



林芙美子 女のひとり旅

角田光代　橋本由起子

136頁／1470円



有元利夫 絵を描く楽しさ

有元利夫　有元容子

山崎省三

152頁／1575円



京都洋館 ウォッチング

井上章一

128頁／1680円



古伊万里 磁器のパラダイス

青柳恵介　荒川正明

128頁／1470円

とんぼの本は、美術、生活、歴史、旅などをテーマとするヴィジュアルの入門書、案内書のシリーズです。創刊は1983年。まず10月に『やきもの鑑定入門』『竹久夢二写真館「女」』『K2に挑む』、つづいて11月に『やさしい仏像の見方』『松本清張カメラ紀行』を刊行しました。そのうち「やきもの」と「仏像」はいまも版をかさねています（累計部数の上位2冊でもあります。ほかの3冊はざんねんながら絶版ですが、こうして見るとなかなかとんがっていましたね）。創刊以来30年間で347冊の本を作り、176冊の版が生きています（2013年10月現在）。

シリーズ名の由来を訊かれると「とんぼのように視野を広くもちたい、という思いから」（と聞いています）とこたえています。とんぼは前にしか進まないことから「決して退かない虫」すなわち「勝虫」とよばれて、戦国武将の「変り兜」の意匠にも使われました。縁起のよい名でよかったと思いますが、本を作ることは勝ち負けではないので、いまは秋の空を飛びまわるとんぼのあの身軽さ、自由さを心がけようと思っています。

じつは30周年を機に、とんぼの本のシンボルマークを新しくしました。作者は画家のnakabanさん。〈何年経っても見飽きないとんぼがいいな〉。nakabanさんはマークを考えるにあたって、西洋中世のロマネスク美術をヒントにしたそうです。〈素朴で力強く、タイムレスなかたち。神秘的で人なつこい〉――とんぼの本も、そんな本でありたいと願っています。

これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

私の好きなとんぼの本❷

川瀬敏郎

花人



かわせ・としろう　1948年京都府生れ。幼少より池坊の花道を学ぶ。日本大学芸術学部卒業後、パリ大学へ留学。1974年に帰国後は流派に属さず、独自の創作活動を続ける。著書に『花会記　四季の心とかたち』『川瀬敏郎　今様花伝書』『川瀬敏郎一日一花』など。

本気であること



草づくし
白洲正子
120頁／1575円

草花そのものについてだけでなく、美術や民俗へも筆がのびています。それだけに濃密ですが、文章はさりげなく、白洲先生も楽しみながら書かれたのでしょう。写真もいまふうではないかもしれないけれど、思いがけない構図があったりします。

選んだ5冊は何度も読み返しているものです。どの本も、あらわしかたこそことなるものの、背後に濃密さを感じます。表面的ではない、というか。

本気であること、ほんものであること。それが人をひきつけるのだと思います。すべてを理解しなくてもいい。ほんの1ミリでも伝われば、それをもとに、人は歩いてゆくのですから。



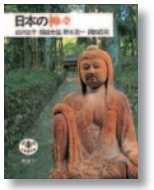
イタリア古寺巡礼
シチリア→ナポリ
金沢百枝　小澤実
128頁／1680円



五重塔入門
藤森照信　前橋重二
128頁／1680円



フランス ゴシックを仰ぐ旅
都築響一　木俣元一
144頁／1470円



日本の神々
白洲正子　堀越光信
野本寛一　岡田荘司
160頁／1995円

私の好きなとんぼの本❸

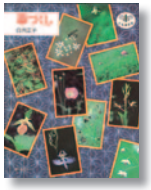
中谷美紀

女優



なかたに・みき　1976年東京都生れ。10月5日より主演舞台『ロスト イン ヨンカーズ』がパルコ劇場他で上演。今年11月には映画『清須会議』、12月には『利休にたずねよ』が公開。来年1月よりNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』に出演。著書に『インド旅行記（1-4）』『女心と秋の空』など。

ため息と回し読み



草づくし
白洲正子
120頁／1575円

老若男女を問わず、花の名前を知っている人を無条件に素敵だと思えます。高山植物のくろゆりをめぐって北政所と淀君が火花を散らしたという伝説を、本書ではじめて知りました。



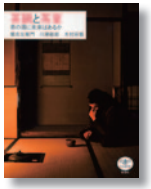
沢村貞子の献立日記
高橋みどり　黒柳徹子
山田太一　笹本恒子ほか
128頁／1680円

女優としてのみならず文筆家としてもいぶし銀の輝きを放っていらした沢村貞子さんが27年間にわたって綴った献立は、いたずらに過ぎてゆく日常がどれほど尊く愛おしいものか教えてくれます。



世界の名作住宅をたずねる
ルイス・バラガンの家
ワタリウム美術館編
144頁／1575円

シンプルな線と面で縁取られた建築が日本人の心をくすぐります。「ああ、こんな家で暮らしたい」と思わずため息が漏れるのは、余白がこの家を覆っているからなのでしょう。



茶碗と茶室
茶の湯に未来はあるか
樂吉左衛門　川瀬敏郎
木村宗慎
128頁／1680円

映画『利休にたずねよ』にて、利休の妻宗恩を演じた折に、長次郎の「万代屋黒」でお茶を点てるという又とない機会に恵まれましたが、現代に生きる人間が茶の湯とどう係わっていくのか、本書の問いかけに身がすくみます。



浮世絵入門
恋する春画
橋本治　早川聞多
赤間亮　橋本麻里
128頁／1680円

男女がはばかりもなく、くんずほぐれつしている姿が笑いを誘い、徹夜仕事の折などには一服の清涼剤のように疲れを癒やしてくれるので、思春期の学生よろしく回し読みをしたりしています。

私の好きなとんぼの本❹

中村好文

建築家



なかむら・よしふみ　1948年千葉県生れ。武蔵野美術大学建築学科卒業。81年、設計事務所レミングハウスを設立。87年「三谷さんの家」で吉岡賞、93年「一連の住宅作品」で吉田五十八賞特別賞を受賞。著書に『住宅巡礼』『住宅読本』『意中の建築（上・下）』『中村好文　小屋から家へ』など。

とっておきの「人」

生まれつき好奇心が強く、興味の幅も広いほうですが、「とんぼの本」は、そうしたこちらの正体を見透かしたようなラインナップで、書棚の前に立つぼくの目を迷わせ、心を惑わせてくれます。

とりわけ僕の好きなのは、美術を、生活を、旅を、歴史を、とっておきの「人物」と重ね合わせて紹介してくれる一連のシリーズ。

選んだ5冊も、期せずしてそうした本になりました。



洲之内徹
絵のある一生
洲之内徹　関川夏央
丹尾安典　大倉宏ほか
144頁／1680円



沢村貞子の献立日記
高橋みどり　黒柳徹子
山田太一　笹本恒子ほか
128頁／1680円



池波正太郎が
残したかった「風景」
池波正太郎　重金敦之
土屋郁子　近藤文夫ほか
144頁／1365円



須賀敦子が歩いた道
須賀敦子　松山巖
アレッサンドロ・ジェレヴィーニ
芸術新潮編集部
128頁／1470円



遠藤周作で読む
イエスと十二人の弟子
遠藤周作　遠藤順子
芸術新潮編集部編
128頁／1365円

私の好きなとんぼの本❺

原田マハ

作家



はらだ・まは　1962年東京都生れ。関西学院大学文学部日本文学科および早稲田大学第二文学部美術史科卒業。森ビル森美術館設立準備室に在籍中、ニューヨーク近代美術館に派遣され勤務。2005年『カフーを待ちわびて』で第1回日本ラブストーリー大賞受賞。著書に『楽園のカンヴァス』『ジヴェルニーの食卓』『総理の夫』など。

大いなる散財

宇野千代、白洲正子、小林秀雄、三島由紀夫、そして高峰秀子。この人物たちは、美の旅人であり、美的暮らしの達人であった。つまりは、その人生において、美に対するあくなき探求を続け、美に対する妥協をしない、美の巨匠であった（以上、『美』という文字を一気に五回使った）。私は、彼らの生き様に憧れ、彼らのようになりたいと思うあまり、一年の半分以上を旅に費やし、生きていくのには必要はないけれどもあれば生活が豊かになる、というような文物――香水、ストール、鉄瓶から書画骨董まで――を、旅先でせっせと買い漁っている。身銭を切って気障を気取り、自らの流儀に妥協を許さぬ巨匠たちに、少しでも近づきたいと日々願っている。それが、私がとんぼの本を熟読する理由である。そして散財する最たる理由でもある。



白洲正子
〝ほんもの〟の生活
白洲正子　青柳恵介ほか
144頁／1575円



三島由紀夫の
愛した美術
宮下規久朗　井上隆史
128頁／1575円



高峰秀子
旅の流儀
斎藤明美編
128頁／1680円



小林秀雄
美と出会う旅
白洲信哉編
128頁／1470円

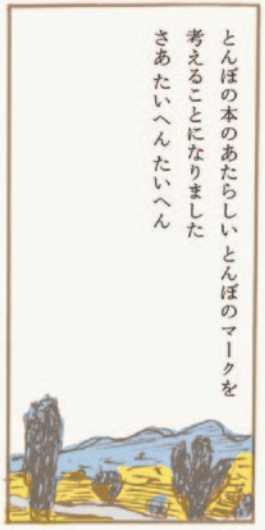


宇野千代
女の一生
宇野千代　小林庸浩ほか
128頁／1470円

とんぼのマークができるまで

nakaban













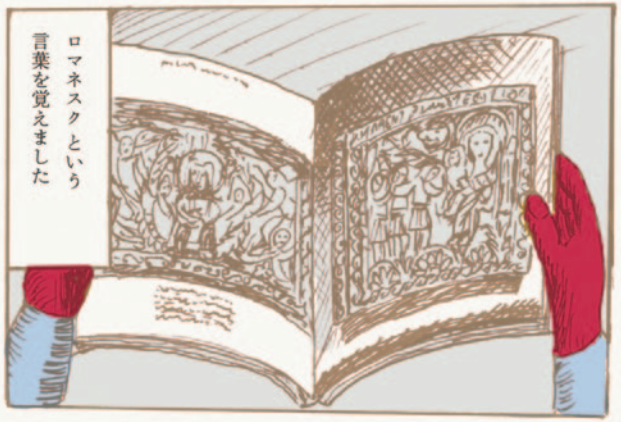










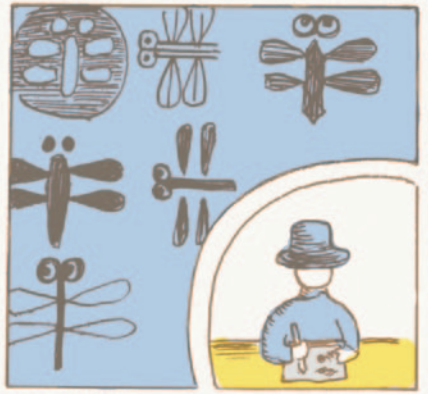












おすすめの とんぼの本

サンティアゴ巡礼の道
ローマ古代散歩
パリ 中世の美と出会う旅
イタリア古寺巡礼
フランス ロマネスクを巡る旅

nakaban 画家。1974年広島県生まれ。絵画を中心に、絵本、アニメーション、イラストレーションを手掛ける。

座談会

とんぼの本会議

辻山良雄　中村邦夫　幅允孝

書店員、ブックカフェ店主、ブックディレクター。
つとに知られた本の眼利き3人が語る、
とんぼの本シリーズのこれまでとこれから。



▲**中村邦夫**　なかむら・くにお
「6次元」店主。映像ディレクター。1971年東京都生れ。荻窪のブックカフェ「6次元」を運営。『+DESIGNING』で「デザインガール図鑑」、朝日小学生新聞で「世界の本屋さん」連載中。2013年秋に『6次元という空間遊び』（阪急コミュニケーションズ）刊行予定。

▲**幅允孝**　はば・よしたか
BACH（バッハ）代表。ブックディレクター。人と本がもう少しうまく出会えるよう、様々な場所で本の提案をしている。伊勢丹新宿店の本館B2F「ビューティアポセカリー」に本棚を設置するなど、その活動範囲は本の居場所とともに多岐にわたり、『本の声を聴け　ブックディレクター幅允孝の仕事』（著・高瀬毅／文藝春秋）に詳しい。www.bach-inc.com

▲**辻山良雄**　つじやま・よしお
リブロ池袋本店マネージャー。1972年神戸生れ。広島店店長、名古屋店店長などを経て、現職。名古屋では「BOOKMARK NAGOYA」の立ち上げに関わり、現在は池袋本店で数多くのイベントや大型原画展などの企画・運営などにも携る。

中村　とんぼの本の印象をひとことでいうと「ヴィジュアル系オトナの教科書」ですね。そこにはコロナ・ブックス（平凡社）や、ふくろうの本（河出書房新社）、古くはカラーブックス（保育社）も入ると思うのですが、そのなかでもとんぼの本は入門書からディープなものまで、バランスがとれている。ただ、トークイベントなどで若い人と話すと、彼らがいま興味をもつのはカラーブックス。あのストイックさがいいらしい。

辻山　『門と塀』なんて本まであります からね。

中村　最近のとんぼの本では『**地元菓子**』がカラーブックス的というか、マニアックでよかった。九月に出る『**変り兜**』も期待しています。

幅　このところ編集方針が変ってきた気がします。かつてのとんぼの本が教科書的だとしたら、いまはもう少し「主語」がはっきりしている。たとえば磯崎新が語る建築シリーズや、リリー・フランキーが語るビートルズなど。

中村　いわゆる「暮し系」の本も多くなりましたね。新しいロゴマークもとてもいい。nakabanさんという描き手の選択は意外性もあるし、鋭いと思いました。幅さんのお仕事はあたかもDJのように、本を選んで並べることだと思うのですが、いかがですか、とんぼの本の使い道は？

幅　使い道は多いですよ。やはり入門書として最初に手にとる本だし。

辻山　本棚を「編集」するという考えは、日本独特かもしれませんね。

幅　とんぼの本のよさは「つなぎ役」にもなるところ。AとBの棚をつなごうと思ったときにクッションになってくれる。『**私の好きなもの**』なんて、建築でも京都でも、どこに差しても大丈夫です。

辻山　たしかに、いろんな場所に置ける本がふえていますね。うちでも基本はシリーズの棚ですが、たとえば『**沢村貞子の献立日記**』は「文芸」でも「生活」の棚でも置いています。

私の一冊

幅　感銘を受けた一冊があります。『**鮨12ヶ月**』「新橋鶴八」の鮨を月ごとに紹介するというシンプルな構成ですが、毎回のようにコハダが出てくる。そしてそこで語られる、先月と今月のコハダの違いの話がたまらないんです。

中村　僕の一冊は『**洲之内徹　絵のある一生**』。高校生のとき図書館で「気まぐれ美術館」の連載をずっと読んでいました。洲之内さんは文章はもちろんのこと、地方の知られざる画家を発掘したり、すごい人だったわりにはあまり知られていない。

辻山　『**向田邦子　暮しの愉しみ**』はとんぼの本らしさが詰まった一冊と思います。女性の生き方もの、文芸ものでもありつつ、近年人気の「暮し系」の要素もすでに入っていて、間口が広い。それと『**ディック・ブルーナのデザイン**』。ブルーナをデザイナーとして評価したさきがけだし、仕事上でも数多く売った本として思い出深い一冊です。

幅　教科書的な内容は根強い需要がありますが、いまはネットでもある程度拾える。僕が紙の本に求めるのは、もう少し下に沈んでいるものを掬いあげた本です。『**鮨12ヶ月**』の何に感激したかといえば、そこにかけられている時間。きっとこの本は二〇年後に読んでもおもしろい。

辻山　NHKの「新日本紀行」のような本も作ってほしい。北海道、東北など各地方ごとに、文学、美術、歴史などさまざまな視点を入れて。とんぼの本ならできますよね。

幅　『**親鸞の「迷い」**』を読んで直江津の居多ケ浜へゆきました。弾圧され配流され、妻子と暮した土地です。親鸞は以前から好きで読んでいたのですが、この本に出会って、そうか、行ってみようと思った。親鸞と同じ思想をもつのは無理でも、同じ場所に立つことはできる。そして実際に行ってみると、親鸞と自分との距離が測れた気がした。とんぼの本はそうした行為――多くは旅ですが――をうながす本でもありますね。

売行きベスト3

中村　とんぼの本は一九八三年の創刊以来三四七冊作られていて、今年一〇月現在、版が生きているのは一七六冊だそうです。

辻山　かなり残っていますね。

中村　売行きのベスト3は順に『**やさしい仏像の見方**』（一九八三年刊）

『やきもの鑑定入門』（同）**『仏像の見分け方』**（一九八七年刊）とのこと。

辻山　白洲正子さんの**『草づくし』**もかなり前ですね（一九八五年刊）。子供のころ家にありました。母親が読んでいた。

中村　僕の場合は**『イスタンブール歴史散歩』**から。テレビの撮影でカールスモーキー石井さんとトルコへ行ったとき、この本を持参しました。ナレーションもこれを見ながら書いた覚えがあります。僕にかぎらず、とんぼの本をネタもとにしたテレビ番組はかなりあるはず。

幅　以前、青山ブックセンターの六本木店に勤めていて、建築・デザイン担当でした。とんぼの本の**『やさしく極める〝書聖〟王羲之』**（石川九楊著）が出たとき、グラフィックデザインの棚に置いたんです。都築響一さんが編集した「アートランダム」シリーズの『石川九楊』と、当時流行しはじめたグラフィティアートの本と一緒に。そうしたらけっこう売れた。じつはそれが本棚を「編集」した最初です。だからよく覚えています。

辻山　今年夏の集英社文庫のフェア、キャラクターがAKB48でした。売れましたね。しかも若い世代に。太宰治や宮澤賢治など、コンテンツは古くても、やり方によってはまだ読者を掘りおこせる。

中村　とんぼの本だと何でしょう？

辻山　とんぼの本は……逆にいまの時代におもねらないほうがいいでしょうね。五〇〇〇人から一万人に届く本を、細く、深く、ていねいに作ってゆく。本そのものはいままで通り静かな佇まいを保ちつつ、たとえば「6次元」でイベントを開くなど、外側で仕掛けてゆくことが大事ではないか。

幅　新刊も出しすぎないほうがいいと思います。それよりも、既刊をなるべく絶版にしないように、掘りおこしの工夫が必要。

辻山　たしかに。とんぼの本はロングセラーが多いので、他の本のように新刊時に慌てて何かやるより、既刊本でも世間の動向を見て何度でもイベントを仕掛ければいいし、そのほうが効果的です。

幅　それと大事なのは、シリーズとしての認知度を高めること。正直いって読者は、とんぼの本とコロナ・ブックスの違いはあまり気にしていない。それでも、作る側が「とんぼの本とはこういうもの」という考えをしっかりもっていれば、じきにそれは伝わり、広がります。

辻山　いまはいろんなカフェやショップも、蘊蓄を語りますよね、コンセプトというか。こんな時代なので、みんなよいものを選びたい。そのときに「とんぼの本は……」という説明、ストーリーがあると、迷っているお客さんの背中を押すことになると思う。その意味ではロゴマークはとても大事です。

中村　せっかくnakabanさんが描いたのだから、とんぼの絵本を作ったらどうですか。4コマ漫画もいいかもしれない。それをウェブで公開する。最近は美術展でも、新聞や雑誌の告知より、何かひとつ特製グッズが話題になるほうが集客につながるらしいですから。

幅　僕は什器も作ってしまえばいいと思う。本棚のように大仰なものでなく、板を二枚合せただけの看板状のもの。その片面に、たとえば一二冊並べる。とにかくとんぼの本は書影を見せるべきですよ、書店で。

辻山　それだと場所もとらないし、ありがたいかもしれません。

幅　壁に立てかけてもよいわけだから。「壁を貸してください」っていって。什器の持込みが効果的なのは、シリーズのコンセプトまで表現できるからです。手帖のモレスキンはそれで成功した。大事なのはていねいに作ること。むしろそれがあることで、書店の空間が素敵に見えるくらいでありたい。いま出版社から送られてくる宣伝ツールは、ＰＯＰも販売台も「売らんかな」色が強すぎて、書店の空間のことを考えていない気がするんです。

中村　それいいですね。使い捨てじゃなくて、使いこむことで味も出てくる。

幅　二〇年は使ってほしい。そこで生れるストーリーが、とんぼの本の「手ざわり」になるはずです。

中村　とんぼの本は判型も独特ですね。縦二一六ミリ、横一六六ミリ。手にしたときに横幅を広く感じる。コロナ・ブックスとふくろうの本も同じサイズですが、あれはとんぼの本にならったのでしょうか。

辻山　ただ、とんぼの本にもA5判（縦二一〇ミリ、横一四八ミリ）の時代がありますね（二〇〇二年四月―一一年四月）。印象はかなり違って、ヴィジュアルブックとしてはいまのほうがいい。ふつうの本じゃないということがおのずと伝わります。

幅　変型っていいですよね。

辻山　棚に差したときに少しはみだして、その意味でも目立ちますし。

幅　いまこうやって本の背を見ていると、最近は長い書名が多いですね。かつての本は『〇〇入門』『〇〇案内』などと簡潔。

中村　**『地元菓子』**は短い。

幅　いまの時代はそっちでしょうね。タイトルでは説明せず、余白があったほうがいい。

壁を貸してください

辻山　類書を何冊か並べても、お客さんが手にとる本ととらない本がある。その違いって何だろうと思うんです。さっきの幅さんの話を聞いて思ったのは、結局のところかけられた時間、手間ヒマではないかと。それが本の手ざわりのようなものとして残り、お客さんに伝わる。

中村　すでに誰かがいったこと以外のこと、よくよく考えたことが書かれている本は、佇まいでわかります。

辻山　文章だけならネットで無料で読めると、何となくみんなが思っている時代なので、出版社さんも書店も、どうしたらお金を出してもらえるか、本気で考えないと難しい。いまは二〇〇〇円を超えると高い、と思う人が大半でしょう？

中村　とんぼの本のホームページで連載していた川瀬敏郎さんの**『川瀬敏郎　一日一花』**は三六七五円ですが、よく売れているそうです。カラー四〇〇頁の本。

辻山　**『一日一花』**のように、値段に見あったものであることが一目瞭然なら、抵抗なく買っていただける。

中村　うちでふだんおこなうトークイベントはドリンクつきで一五〇〇円。二〇代の若者もたくさん来ます。ワークショップだと三〇〇〇円でも問題ない。印象としてはむしろ若い人のほうがその金額に抵抗を感じていません。ふしぎですね。一五〇〇円の本は高く感じるらしいのに。

幅　フジロックのチケットが三日間で四万円くらいでしょう？　彼らは「体験」にはお金を出す。やっぱり、顔をあわせて何かしたほうがおもしろいんですよ。僕もこのごろは読書フェス的なイベントを開くことが多いのですが、本の感想を誰かと語りあいたいという参加者の思いの強さを実感する。ネット上ではだめなんです。すぐケンカになったりする。いま大学で教えてもいるのですが、たしかに二〇歳くらいの子たちに本を読ませることは難しい。三〇代は本好きもわりといる気がしますが、二〇代はおそらく書店にはもうほとんど行かない。でも先日、一九歳の男子学生が『POPEYE』の表紙を見て「これやばいっすね、安西水丸やばいっす」と興奮していました。その様子を見て、ヴィジュアルは突破口になるかもしれないと思った。

辻山さんが薦める5冊

『向田邦子　暮しの愉しみ』
向田邦子　向田和子　144頁／1470円

『遠藤周作で読む　イエスと十二人の弟子』
遠藤周作　遠藤順子　芸術新潮編集部編
128頁／1365円

『ディック・ブルーナのデザイン』
芸術新潮編集部編　112頁／1470円

『ビートルズへの旅』
リリー・フランキー　福岡耕造
160頁／1680円

『ル・コルビュジエの勇気ある住宅』
安藤忠雄　128頁／1470円

中村さんが薦める5冊

『日本民藝館へいこう』
坂田和實　尾久彰三　山口信博
120頁／1470円

『日本の神々』
白洲正子　堀越光信　野本寛一　岡田荘司
160頁／1995円

『洲之内徹　絵のある一生』
洲之内徹　関川夏央　丹尾安典　大倉宏ほか
144頁／1680円

『ひらがなの美学』
石川九楊　128頁／1575円

『イタリア古寺巡礼　シチリア→ナポリ』
金沢百枝　小澤実　128頁／1680円

幅さんが薦める5冊

『鮨12ヶ月』
石丸久尊　杉本伸子　野中昭夫　早瀬圭一
128頁／1470円

『やさしく極める〝書聖〟王羲之』
石川九楊　120頁／1680円

『地元菓子』
若菜晃子　128頁／1680円

『唐津　やきものルネサンス』
青柳恵介　荒川正明　川瀬敏郎　西田宏子
128頁／1365円

『日本のかご　えらぶ・かう・つかう』
小澤典代　128頁／1680円

2013年9月の新刊



英国のOFF
上手な人生の休み方
入江敦彦
128頁／1680円

Lazy Sunday

「ライジー・サンディー・アフタヌーナァ!!」
1960年代イギリスのモッズ・ムーブメントの代表的なバンド、スモール・フェイセスの人気曲「Lazy Sunday」のサビ部分である。頭にこびりついて離れないこのフレーズの奇妙な発音が、どうやら「コックニー訛り」らしいと知ったのはずっと後。コックニーとは東ロンドン、つまり「イーストエンド」に多く住んでいた労働者階級の人々のことで、メンバーはみなこの地域の出身なのである。こうした都市のロウアーなエリアに住む人々は独特の「粋」の感覚を持っていて（江戸の下町と同じく）、ロンドンから300km離れた街から来た地方出身者のビートルズにはない、ジモティ（死語ですか）ならではの「お洒落なワル」のムードが、彼らの音楽からはビンビン感じられた。

「Lazy Sunday」は「のんびりとした日曜の午後、何も気にしないで、目を閉じてウトウトしよう」と歌った曲だが、入江敦彦『**英国のOFF**』によれば、日曜の午後のコックニーたちは電車に乗ってテムズ川の河口へ貝類を肴に一杯やりに行くのが習慣なのだそうだ。かつては「満足な長期休暇をとれない仕事」に就いている人が多かったイーストエンドの人々にとって、最寄り駅から国鉄一本乗り換えなしで味わえる海の幸は大切な休日の楽しみだったとか。本書はこうしたイギリスのさまざまな地域に住む人々が過ごす独特の「OFF」のあり方を描いたエッセイである。

京都と英国について、その住民性をテーマにした多くの著書を持つ入江は1961年に京都市上京区西陣の髪結いの長男として生まれた生粋の京都人だが、渡英してすでに20年以上が経っており、レジデンツとしてのキャリアは相当なもの。当然ながら、その視点は豊富な体験と深い洞察に基づいている。

ブリテン島南部へイスティングスでは友人たちとこだわりまくった「男のジャム」作りに参加し、春の終わりと秋の始まりのロング・ウィークエンド（土日の前後どちらかにもう1日休みを取る、忙しいミドルクラスのためのOFF）はウィチタブルで旨い地元牡蠣を出す店の経営者と食いしん坊談義に興じる。サマーホリデーは親友の一族が毎夏過ごすハーリイのキャラバン（可動式住居）で時間を贅沢に「浪費」する。それぞれの土地、それぞれの家族、それぞれの人の休み方があるけれど、あくまで個人の嗜好に忠実に、自由に楽しむ英国流の「上手なOFF」は、枠にはまった日本人の「休み」観をほぐしてくれる。細やかな地域性の違いに鋭い批評と深い愛情をもって目を向けたテキストが与えてくれる「気付き」が楽しい。

井出幸亮／編集者

とんぼの本棚から



ビートルズへの旅
リリー・フランキー
福岡耕造
160頁／1680円

2013年9月の新刊



変り兜
戦国のCOOL DESIGN
橋本麻里
128頁／1680円

過剰系美意識の系譜

和をもって尊しとなす日本の歴史の中に、下克上を旨として、特異点のように存在する戦国時代には、甲冑も異様な進化を遂げた。

『**変り兜　戦国のCOOL DESIGN**』は、室町時代以降、武将たちがさまざまに意匠を凝らして競い合った兜を、時代背景を交えながら、ユニークさを重視したセレクトで紹介している。それにしても、戦場のような緊迫した場で、こんなオモシロセンスを発揮していて大丈夫？　兜はずっと被っているわけだし、武将の代名詞になったりもするから、下手にやってカッコ悪かったら、ただの晒し者になってしまう。だからといって、無難な方向にはいかなかったのが、戦国の世というものなのだろうか。

フサフサの毛虫を模した「七十二間筋兜」、頭の上ににょっきり腕が生えたような「金剛杵形兜鉢」、空気抵抗で首が折れないか心配してしまう「一の谷形兜」など、奇をてらったようなモチーフもあるが、それぞれに武士の勇猛さや、信仰心の表れ、縁起を担ぐ意味があったりして、戦場という場での心理的効果も考えた立派な実用品なのだ。文脈は重視しつつ、自分だけの創意工夫をする——方向性はまったく違うけれど、同時代に隆盛した茶の湯にも通じる感覚だ。

現代に変り兜のセンスを当てはめるとして、本書の冒頭で、オタクのコスプレ文化ではなく、「いささか古典的なヤンキー文化」との共通性を指摘しているのは、さすが橋本麻里さん！という感じだけど、さらに言えば、ギャル・ギャル男文化も、この系譜に連なるのではないだろうか。彼らの用語に「盛る」という言葉があり、過剰な化粧などで、実物より可愛く、派手に見せたりすることを指す。とくに「髪を盛る」ことに関してはエスカレートしていて、そのまま武将の兜のようだし、内輪で共有されている美意識に基づいていたり、外部の人間としては「この努力に何の意味が……」と思いつつも、圧倒されるパワーは認めざるをえないところも、なんだか似ている。そういえばギャル男雑誌『メンズナックル』のストリートスナップにつけられた煽り言葉が過剰ということで、一時期ネットで話題になったが、本書のどーんと1頁に1兜、インパクト重視のキャッチが添えられている形から、なんとなくそれを思い出した。ただのモノとしての紹介ではなくて、それを作った・作らせた武将の「どうだ！」という顔を見せつけられているようで、実際に使われた現場の血腥さとは裏腹に、ほほえましくすら思ってしまうのも、変り兜の魅力だ。

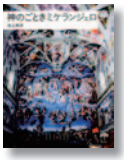
猿田詠子／編集者

とんぼの本棚から



利休入門
木村宗慎
120頁／1470円

とんぼの本のラインナップは現在176点。
みなさまとの出会いを心待ちにしています。



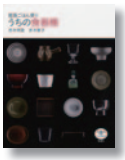
神のごとき ミケランジェロ
池上英洋
128頁／1680円



ワダエミ 世界で仕事をするということ
ワダエミ　千葉望
128頁／1680円



レオナルド・ダ・ヴィンチ 人体解剖図を読み解く
前橋重二
128頁／1680円



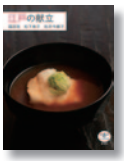
能登ごはん便り うちの食器棚
赤木明登　赤木智子
128頁／1680円



誰も知らない ラファエッロ
石鍋真澄　堀江敏幸
128頁／1680円



私の好きなもの 暮しのヒント101
岡尾美代子　高橋みどり
東野翠れん　福田里香ほか
128頁／1680円



江戸の献立
福田浩　松下幸子
松井今朝子
128頁／1680円



高峰秀子 夫婦の流儀
斎藤明美編
128頁／1680円



気になるガウディ
磯崎新
128頁／1680円



運慶 リアルを超えた天才仏師
山本勉　みうらじゅん
ヤノベケンジ　橋本麻里
128頁／1680円



ヴェネツィア物語
塩野七生　宮下規久朗
128頁／1680円



白洲正子のきもの
白洲正子　牧山桂子
青柳恵介　八木健司
128頁／1680円



とんぼの本のホームページもぜひ御覧ください。新刊案内や連載等、随時更新しています。
http://www.shinchosha.co.jp/tonbo/

記載した価格は消費税（5%）をふくむ定価です（2013年9月末現在）。